

昨年の秋

去石 信一
(盛岡市)

昨年の秋、自宅がある盛岡市郊外の小さな山をハイキングしていたら、林道脇でシカを解体しているハンター2人に会った。北海道同様、岩手県でもシカの増加が問題になっており、原因の一つがハンターの減少と言わることが頭にあったので話しかけてみた。

少し雑談して相手の警戒心を解いた後、「シカが増えたのは捕る人が減ったからと言われていますね」と話を向けると、「減って当たり前だよ」と不満をぶつけてきた。

聞けば、3年に1度の狩猟免許更新が煩わしいという。2009年に銃刀法が改正され、更新ごとの技能講習が必修化され、毎年シーズン前の射撃練習も義務化された。銃と弾の管理が厳重化され、「10万円以上もした」という保管庫の購入も余儀なくされたそうだ。

「毎年、警察が身辺調査のため近所にオレのうわさを聞いて回るんだよ。特に夫婦仲を調べるんだね。けんかして、カッとなつてぶつ放すことがないか恐れているんだろうけど、いい気持ちはしないよ。続けたいなら夫婦円満でなきゃいけないね」と、辟易した様子だった。

江戸時代も岩手県内にはかなり広い範囲にシカが生息していたようだ。その一端が垣間見えるのが盛岡藩に残るシカ狩りの記録だ。「盛岡藩御狩り日記」(遠藤公男氏著、1994)によると、1日で1,620頭も仕留めたとの記述もあるという。乱獲は昭和初期まで続き、県内の南東部にある五葉山周辺を除いて県内ではシカはほとんど見られなくなった。「五葉」は「御用」から変わった名前で、伊達藩がこの山を守ったことがシカにとって幸いした。

しかし近年、その五葉山を起点にシカが生息域を拡大し、農作物を食い荒す、電車にはねられてダイヤが乱れるなど、北海道と同じ現象が頻繁に起きている。県による最近の生息数調査はないが、県内の南半分を中心にシカを目にするすることは珍しいことではない。一方、ピークの1976年度に9,000人を超えていた県獵友会の会員が現在は2,000人を切った。行政は狩猟を奨励しているが、思うように増えない。

そこで心配されることの一つが、早池峰山の高山植物への影響だ。蛇紋岩の山で、北海道で言えば夕張岳のように貴重な植物が多い。ハヤチネウスユキソウに代表される固有種は5種あり、その

他の希少種、日本の南限種、北限種も数多い。今このところ、山頂付近で見たという話を私は聞いていないが、鳴き声は耳にしたという人はいる。ふもとでは頻繁に現れ、山を登るのは時間の問題とも言われる。江戸時代なら餌は平地に豊富にあつたはずだから早池峰を荒らす必要もないが、広く開発された現代は餌場が限られ、こんな懸念も生じる。

私の両親の実家は早池峰の北側の山裾にあり、親戚は「昔はまったく見なかったのに、10年くらい前から見るようになった」と驚いている。「畑を作っても、シカに食わせているようなものだ」とため息は深い。